ワークショップでプレゼン技術も磨き 国家試験合格にも備える「摂食嚥下リハビリテーション学」

歯学部 教授 **松山 美和**（まつやま みわ）

ワークショップの導入は提携校への海外視察がきっかけ

歯学部口腔保健学科は、学生が自ら考え、より深く学べるよう、ワークショップやチュートリアルを導入した授業が多くあります。口腔保健学科3年生を対象とした「摂食嚥下リハビリテーション学」もそのひとつ。

「摂食嚥下リハビリテーション学」は全部で30時間あり、その半分にあたる16時間がワークショップで構成されています。

松山先生がワークショップ形式の授業を取り入れようと思ったのは、インドネシアにある提携校ムハマディア大学へ、歯学部2学科の学生と共に海外研修に行ったことがきっかけでした。

「ちょうどそのとき、現地でもこの授業と同じ、摂食嚥下についてのグループワークをしていました。1グループに1人～2人ずつ、本学の学生も参加させてもらったのですが、お互いに意見交換しながら学ぶ姿が印象的で、ぜひ取り入れたいと思いました」と振り返る松山先生。

しかし通常の授業は1単位15時間。グループワークを行うには時間が足りないため、2単位30時間ある科目で始めようと、「摂食嚥下リハビリテーション学」でのワークショップを開始。平成27年3月に海外研修へ行き、その年から導入し、現在まで8年間続いています。

相手に伝わるプレゼンを心掛け早い段階から訓練を重ねる

ワークショップは「摂食嚥下リハビリテーション学」で重要なポイントを摂食嚥下機能のメカニズム、障害の病態と原因、評価法と検査、摂食機能療法の具体的訓練の大きく4つに分け、そのポイントをテーマとした4回のワークショップを行います。

1テーマは4時間。最初の3時間はグループに分かれてのプロダクト（発表資料）作り、最後の1時間で発表というスケジュールで、4人1班、4班に分かれて行います。

プロダクトは初め提出用のシートに手書きでまとめる形式でしたが、コロナ禍、Teams を使ったオンライン授業になったことをきっかけに、パワーポイントが主流になりました。対面での授業が再開された今、より分かりやすい資料作成を目指し、動画を活用するなど、資料作りの幅も広がりました。

導入を決めた当初は「3時間のグループワーク＋1時間の発表というスケジュールで大丈夫かな？」と不安に思っていた松山先生ですが、回を重ねるごとにまとめるスピードも早くなり、要点を掴んだプレゼンを行うまでに成長する学生の姿に、驚かされることも多いといいます。

「3年生の後期から4年生にかけては卒業研究を行い研究発表もあるため、それぞれのテーマについて学習するだけでなく、プレゼン資料の作り方や発表の仕方についても、早い段階から意識して行えるようになって欲しい」と発表の際の声の出し方、目線の方向などについてもアドバイスします。

プロダクトの見せ方も「内容を簡潔にまとめて箇条書きにする」、「大事なところにアンダーラインを入れる」、「図表にまとめる」など、教員側から指摘するだけでなく、発表後は学生からの意見も聞き、お互いに評価し合いながら、ブラッシュアップを重ねています。

「復習ドリル」で知識を定着させ、国家試験に備える

授業の最後、学生たちに「復習ドリル」が配布されます。

「復習ドリル」は歯科衛生士の国家試験の過去問をもとに作られたもの。摂食嚥下に関する問題は例年8～10問くらい出題されるため、最近注目されている内容や重要なポイントをピックアップして作成されています。グループワークが終わった後、総括として補足情報も伝え、国家試験の問題にあたることで、知識の定着を図ります。

「『摂食嚥下リハビリテーション学』で使用するテキストは約300ページ。高齢者や障害者の口腔保健学など他の授業と関連するところも多いので、この機会にしっかり学修して欲しい。

学生のみなさんは卒業後も様々なところで発表の機会があると思いますし、歯科衛生士として臨床の現場で積極的に診療やリハビリテーションに参加するためにも、知識を深め、プレゼン技術を磨くためにこの授業が役立つのではないかと思います」。

ワークショップの課題テーマは4つ。

1. 摂食嚥下機能のメカニズムを理解し、説明する。
2. 摂食嚥下障害の病態と原因を理解し、説明する。
3. 摂食嚥下機能評価の各種検査法を理解し、説明する。
4. 摂食機能療法の間接訓練と直接訓練を理解し、説明する。

プロダクト作成中の様子。限られた時間で資料を作り、発表を行わないといけないため、各自スマホも活用しながら分担して調べます。松山先生は各班を回り、質問に答えながら「ネットでは様々な情報が気軽に手に入るけれど、プロダクトを作る際の情報源として信頼性の高い学会のホームページを意識して」とアドバイス。過去のプロダクトを見せていただくと、イラストも秀逸でテーマに沿って丁寧にまとめられていました。原本は松山先生が保管し、それぞれの班の資料はコピーして全員に配布されます。

ワークショップの前の最初の2時間は導入として、2人1組でお互いの食べる様子を観察するところから始まるそう。食べる機能がどうなっているかを考え、資料などを参考に今後どういう点を注視すればいいか、どういったアプローチができるかを考えます。机の上に置かれた資料には付箋がビッシリ!